

今日のいのり

松岡裕子

(画家・キリスト教美術協会実行委員)

小樽生まれ。The College of Wooster
を経て、ミシガン州立大学美術科卒業。
日本美術家連盟会員。公益法人団体専
務理事。東洋英和女学院評議員。霊南
坂教会会委員。

キリスト教絵画への道

「わたしの愛する兄弟たち、思い違いをしてはいけません。
良い贈り物、完全な賜物たまはらはみな、上から、光の源である御父おんちちから来るのです。」(ヤコブの手紙1章16〜17節)

大叔母・朝に育てられて

真夜中に娘と毛布にくるまり、屋上に横たわって宇宙を見上げていました。今から12年前、獅子座流星群のピークと言われた年のことです。無限に深い宇宙と対面していて、強く悟ったことがありました。それは、私が6歳の時に、30代という若さで3人の子どもを遺して旅立たねばならなかった母を思つてのことでしたが、この時、宇宙が与えてくれた答えは、「人の存在の意味は命の長さではない」。それぞれが永遠の絵の中に覚えられているのだ……というメッセージでした。

なく奨励して、児童画コンクールで銀賞をとると、10代の私のために、石川滋彦画伯(新制作)に油絵の個人指導を頼んでくれました。朝自身、ニューヨークのメトロポリタン美術館の学芸員だったこともあり、美術に関心があつたのです。

朝はコロンビア大学に10年学び、日本女性としては社会学法で初の博士号を授与されたこと、中国からの多くの学



「生きる希望をお与えください」(油彩) 筆者画

友が帰国後、要職についていたことなどからか、日中和平工作への尽力を外務省から要請され、新渡戸稲造先生の奨励もあつて、8年を南京で過ごしたのでした。子ども好きの朝は、南京児童学園を設立して校長を務め、親たちと日本との文化交流に勤しみ、また大勢の難民には毎朝炊き出しを自費で励行しました。

心に響く言葉を絵に

終戦の翌年、日本に帰国してからも国際親善に勤しむ大叔母を見て育つた私は、いつの日か自分も留学したいと思っていました。19歳だった1958年、オハイオ州の長老派ウースター大学から奨学金がおりました。地方の大学とはいえ、名門ユニオン神学大学をめざす牧師の子弟などが集るリベラル・アーツ校で、英語では散々苦労しました。唯一苦労しない科目は美術しかありません。でもそれが、後に私がキリスト教絵画の世界に入っていく伏線だったのかもしれない。

音楽教育も盛んな大学で、ある日曜礼拝に音楽専攻の学生によって、ハインリッヒ・シュッツの「十字架上の七つの言葉」が演奏されました。七つの言葉が、声楽と器楽で演奏されると、言葉は生きて心に深く響いて来るのです。感動のあまり、七つの言葉を数枚の絵にしてみたのが、私

にとつて初めてのキリスト教絵画となりました。

その後、中世美術史を学んだ折、ヨーロッパの大聖堂建築の中で最高傑作の一つと言われるフランスのシャルトル大聖堂を知りました。第2次世界大戦では村人がステンドグラスを枠から外して隠しておかげで、12世紀のステンドグラスを今も見る事ができます。「シャルトル・ブルー」と称えられるブルーの存在は、まだ見ぬうちから私の「憧れの色」となりました。

ベルサイユの修道院で開かれた世界教会協議会の予備会議に出席したついでに、パリ在住の甥が念願のシャルトルに連れて行ってくれました。ちょうど日曜日のミサの最中で、パイプオルガンが鳴り響く礼拝堂に佇み、素晴らしいゴシック建築、優れた彫刻、きらめくステンドグラス群を目の前にすると、涙が溢れました。感動は、その後何年も消えることなく、数枚の作品になりました。

ウースター大学では私が美術を続けていくことを期待されましたが、商業デザインも学べるミシガン州立大学へ転校。インテリア・デザインを学び、世界貿易センター（2001年の9・11で崩壊）を設計した建築事務所で働きました。5年間の滞米生活を終えて帰国後、東京芸術大学の吉村順三先生の設計事務所で、当時日本ではまだ走りだったインテリア・デザインを担当させていただきました。新宮殿の

となり、愛情を込めて育ててくれた朝の晩年の悲願を、供養と思つて団体の専務理事に当たつて35年が経ちます。

第2次世界大戦で、日本はアジア諸国に大変な被害を与えました。身内を殺された家族の悲しみ、恨みは世紀を超えても拭えるものではありません。日本と共に美術交流をしましょうと、「アジアキリスト教美術協会」が竹中正夫教授（同志社大学神学部）の呼びかけで1978年に設立されました。私も6年間、会長として協力しました。

その後、癌研に入院していた折に、精神面でのケアがない現実に直面しました。そして、「ターミナル病棟に飾ってもらえる絵が描きたい、どんな色彩がいいだろうか」と模索、「私たちは永遠の絵の中に輝いています」「生きる希望をお与えください」（139頁）という絵を描きました。「羊飼いに手を振る幼子イエス」という絵はニューヨーク

基本設計、正倉院などの名だたる設計をなさつた先生の、「貴女の色感覚を大事にしなさい」との励ましは、今も絵を描くときの警告と支えになっています。

幼子イエスの癒し

日本のルオーと言われる田中忠雄先生（行動美術）には同じ教会員であつたことから、大変親しくしていただきました。「父は牧師として伝道したが、自分は絵画を通して伝道しているつもりだ」と言っておられた先生の影響で、いつしか私もキリスト教美術を志すようになりました。

「公募展とは異なる会にしたい。精神的な美術を志す作家の集まりとしたい」を趣旨に先生が設立したキリスト教美術協会は、今年、第37回展を開催しました。

私は聖心インターナショナル・スクール、文化学院で教鞭をとつた後、子どもが生まれると、自宅で11年ほど絵画教室を開いておりました。一方、80歳になつた朝は、資源の乏しい日本の子供たちの将来を案じて外務省管轄の文化交流の公益法人を設立。オーストラリア、ニュージランドとの友好の架け橋を築く事業に専念し、日本画巨匠による数十点もの作品を両国国民に贈るといふ、高齢には大きすぎるプロジェクトの疲れが元で亡くなつてしまいました。海外相手の事業という責任上、急遽私が跡を引き継ぐこと

の団体により、偶然にも9・11年のクリスマスカードになりました。「赤ちゃんのキリスト像に、とても癒された」との感想が多数寄せられたと伺い、幼子キリストが持つパワーを知らされてから、聖母子像にも挑戦しています。3・11の年には作品や絵葉書の売り上げを被災地へ送らせていただきましたが、今年も、福島の子ども達に何ができるのか、母校の有志達と考えたいと願っております。

遺された者への愛のまなざしを詠つた「1000の風」という詩に、絵と音楽を添えたいと10年来願つてきたことが、CDブックの出版として実現して以来、画像と音楽のコラボレーション・コンサートは、私にとつてとても楽しいイベントになっています。

常に、世の中のために何ができるかという問いかけをしつつ、74歳の今を過ごしたいと願っております。